

第62回近畿中学校総合体育大会陸上競技

(8/6・7 布引グリーンスタジアム) RESULTS

1年男子1500m	奥村 日向	4分37秒88	8位
	島口 大輝	4分54秒32	
1年女子100m	山本 光菜里	13秒63 (+1.7)	

今年の東雲の近畿大会出場者は3人の1年生。共通の部の上場者はゼロ。全国大会出場者が2名いるものの、お家芸のリレーも含めて大阪中学選手権で3位以内に入れなかったきびしい現実がある。それでもフレッシュな3人の選手が、この近畿の大舞台でどんな戦いぶりを見せるのか興味深い大会となった。会場は滋賀県の布引運動公園陸上競技場（布引グリーンスタジアム）。きれいな競技場であるが、スタンドが狭い。スタンドが所狭しと人で埋め尽くされているようで、臨場感あふれる盛り上がった大会となった。今年の夏は猛暑であったが、この2日間は酷暑と形容した方がいいくらいで、きびしい暑さとの戦いともなった。

大会初日。1年女子100m予選に出場する山本光菜里と、1年男子1500mに出場する島口大輝と奥村日向の3人が現地入りした。この初日は15時25分から1年男子1500m決勝がある。午前中はまず、明日競技がある光菜里を連れてサブトラックへ。最終調整をするつもりであった。すでに全国大会出場を決めている3年の姉の祐莉、それからハードルの村上瑞季の2人も同行させた。万全に調整をしようと思った矢先、動きづくりの段階で、「先生、太腿の裏が痛いです」と、光菜里。このひと言で体幹補強に留めることにして、早い目に練習を切り上げさせた。明日のレースにできるだけ違和感なく、レースにのぞませることに最善を尽くすしかない、自分にも言い聞かせていた。

午後2時。島口と奥村を連れてサブトラック場へ。サブトラックと言っても、土のグラウンドで折りからの暑さで、砂漠のように感じてしまう。少ない日陰をできるだけ有効に使って体操やストレッチをさせた。その後、2人別々にジョグ中心のアップを開始させた。奥村は小学校時代、玉島白川陸上で陸上をしていたが、島口はまったくの未経験者。野球少年だったらしい。同じ学校の選手であるが、この近畿大会の切符を手にするまでの競技歴に大きな隔りがあることを考慮してのことだ。この大会の3日前に万博ナイターで2人は1500mを走っているのだが、2人ともあまりキレのある走りができなかった。無理もない。夏休みに入ってから、この暑さの中毎日欠かさず練習しているのだ。それだけで疲労が蓄積する。1年生はその疲労が残らないように練習メニューのさじ加減を



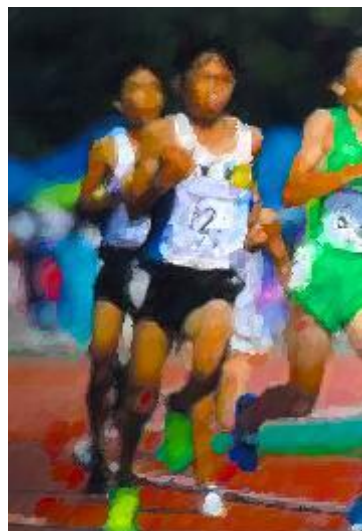
してきたつもりだが、それでも疲労が抜け切れていないと判断し、さらに休養的な調整メニューとなった。2人のジョッグを見終えて、いくつかの指示を出した後、2人を選手招集所へ送り出した。

15時25分。1年男子1500m決勝。近畿2府4県それぞれ3名の代表からなる計18名の選手が勢揃いした。プログラムのランキング表によると、島口の4分32秒38は5位、奥村の4分34秒65は8位となっている。4分30秒台の記録を持つ兵庫の3人の選手の力がやや抜き出ているが、あとは混戦模様となる。スターターのピストルが鳴ると、18人の走者がいっせいにバックストレートを駆け抜ける。第4コーナーを曲がるあたりで、ややペースが落ち着いた感じで奥村は集団の2～3番手あたりの好位置をキープ。

島口はやや集団の後ろに位置していた。集団のスピードが一定のように見えても、かけひきとして小刻みなペースの上げ下げがある。容赦なく照りつける太陽光線もあいまって、ボディーブローのように選手の体力をじわじわと奪い去っていく。600m過ぎ、集団が2つに分かれ出した。先頭集団に食い下がる奥村は6番手あたり。800mを過ぎて、さらに先頭集団のペースが上がる。第2集団の後方に下がっていた島口が苦しそうに首を左右に振り出す。アップのときに体が重そうであったので不安が的中してしまった。やはり、疲労が抜け切れていないのだ。ラスト1周の鐘が鳴った、先頭のペースがさらに上がる。奥村もスパートするが、思うようにペースが上がらない。ラストの直線に入っても順位を上げることなく、そのまま8位でフィニッシュ。4分37秒88。島口は滋賀の選手と競い合うように何とかフィニッシュ。最下位。4分54秒32。

レース後に2人に声をかけた。島口がたまらず泣き出した。「よくがんばったんだよ。練習も毎日よくやったじゃないか。疲労が体に溜まっていて、思うように体が動かなかっただけ。疲労を抜けなかった先生の調整の失敗だったんだ。今日の悔しさを忘れず、毎日きちんと練習して体力の土台を作って、もっともっと強い選手になろう!」と、言った。奥村は「はい!」と力強く返事をした。島口もこのときは顔を上げて同じように返事をした。玉の汗が滴り落ちていた。真っ黒に日焼けした顔でももちろん目は潤んでいたが、瞳はきらきらと輝いていた。

大会2日目。この日も容赦なく太陽が照りつける酷暑となった。山本光菜里の1年100mの予選、準決勝、決勝が行なわれる日となった。「昨日より痛みはだいぶマシになりました」と、アップ場での光菜里は姉の祐莉ゆずりのプラス指向で元気いっぱいであった。光菜里の100mのベストタイムは通信大会で出した13秒45で、ランキングで言えば12





位となる。準決勝進出も際どいレベルとなるために、なおさらこの予選レースが大事なレースとなる。アップが終わって、患部にファイテンのテープを貼り付け、「中盤からの走りが重要になるので、たとえ出遅れたとしても焦らずに自分の走りに徹すること」と伝える。元気な声で「はい!」と返事をして「お願いします!」と、頭をぺこりと下げて、選手招集所へ向かって行った。

10時55分。1年女子100m予選開始。3組4レーンに光菜里。レーン紹介のときの彼女の立ち振る舞いはとても堂々としていた。心配はケガで思うように調整できなかったことであるが、ここまできたら彼女の勝負度胸に賭けるしかないと思った。スターターのピストルが鳴った。光菜里のスタートは悪くない。きれいに重心をとらえながら前傾姿勢をキープしている。中間疾走に入って50mあたり。ほぼ横一線である。60m過ぎたあたり、数人の選手が前に出る。自分の走りを崩さないように必死で我慢する。そこから、光菜里の体の軸が左右にブレた。少しずつ差が開いて、6着でフィニッシュ。13秒63。納得のいかない走りに、腰に手をやり、下を向きながら悔しさを噛みしめる。完敗であった。

3人にとって初めての近畿大会はあっけなく終わってしまった。8位入賞を果たした奥村日向は及第点。それでも自己記録更新を果たせなかったことにいくつかの思いがあるはずだ。島口大輝と山本光菜里は全く力を発揮することなく終わってしまった。3人の陸上競技はまだ始まったばかり。宿泊を伴う遠征であったが、他校の選手と相部屋になったり、食事を選手みんなで共にしたり…。慣れないことで、余分に神経を使う場面があったかも知れないが、それはそれで、陸上競技で大選手になるために意味にある大きな体験だったはずだ。1年生の始めから近畿やジュニアオリンピックで素晴らしい成績を残す選手もいる。大阪大会すら出場できない選手もいる。それでも2年後はその力が逆転するような



場面を何度も見たことがある。だから、いつも競技人生には近道も遠回りもないのだと思う。早くに結果を出すか、後に大きな結果を出すか、選手の数だけその軌跡は幾通りもあるはずだ。大切なのが、今、今、この一瞬、一瞬でベストを尽くすことができているかどうか。その積み重ねができれば必ず大輪の花が咲くことを、過去の教え子たちがたくさん証明してくれているのだ。

2年後には北海道で全国大会がある。今回の悔しさを忘れず、いつも自分の夢に真っ正直に努力を続けて、ぜひ北海道で大活躍するような選手に育ってもらいたい。北の大地で、東雲ブルーの大きな花を咲かせましょう!